

男性保育者の必要性和理想的な保育者の 男女比に関する意識調査 —保育者志望学生と女性保育士を中心として—

戸田大樹 松本佳代子 氏家博子
荒木由紀子 飯塚汐里 高橋健司

要約

本研究は、幼稚園や保育所における男性保育者の必要性和理想的な保育者の男女比に関する意識調査を実施し、保育者養成に寄与するための基礎的資料を得ることを目的とした。質問紙調査の結果、全体的に約60%の割合で男性保育者が「いることが望ましい」との必要性が示された。また、理想的な保育者の男女比は主に「男性2割＋女性8割」や「男性3割＋女性7割」のように低いことが認められた。さらに、男性保育者に対するイメージについて因子分析を行った結果、「活動性」「気配り」「繊細」の3因子が認められた。そして、この男女比の意識の割合には男性保育者及び男子学生との直接的なかかわりの有無が影響していることを示唆している。

I. 問題と目的

近年、単身家庭増加などの要因から男性保育者の需要が高まりを見せている。中央教育審議会(2005)¹⁾は子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方において、「現在、女性教員の割合が9割を超えているが、ある程度幼稚園にも男性職員がいる方が幼児の教育上好ましいとの意見も踏まえ、男性職員の割合を高める方策等を講ずることが望まれる」と明記している。実際に、男性保育者は幼稚園だけでなく保育所においても増加してきている。この男性保育者に関する社会的期待の高まりの過程において、男性保育者に関連する研究も1970年代から現在に至るまでに増加してきた。しかし、男性保育者研究の数は年々と減少の一途を辿っており、一定の終焉を迎えているようにも思われる。以下に、男性保育者に関する研究動向を示す。

国立情報研究所において、男性保育者に関する参考文献は研究発表も含めて95件該当する。研究テーマを概観してみると、最新の男性保育者研究として、柏・佐藤(2015)²⁾による子育て支援における男性保育者の役割に関する研究がある。また、男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響に関する研究(中田, 2002)³⁾など様々である。

本研究は、男性保育者に対する近年の社会的期待を踏まえ、男子保育者に対する意識に関する研究であると位置づける。男性保育者に対する意識に関する研究は国立情報研究所において 23 件該当し、その大まかな特徴としては調査対象が異なっている点にある。具体的には、保護者を対象とした意識調査(斎藤, 2002⁴⁾; 松本・宮宅・澤津, 2014⁵⁾)があり、松本ら(2014)⁶⁾は質問紙調査によって、対象者である 9 割の保護者が男性保育者の存在に賛成していること、また、「男性保育者がもっと増えてほしい」といった期待が自由記述に綴られていたことを報告している。さらに、卒業生を対象とした意識調査(長田, 1997⁷⁾; 氏家・松本・戸田, 2013⁸⁾; 安井, 2013⁹⁾)において、安井(2013)¹⁰⁾は男性保育者として働いている卒業生は「女性では難しい仕事でも男性だからできることがあると考える」と前向きな意識がある半面、「給料面を考えると生活していくには厳しい」「偏見がある」「男性保育者としての必要性を周囲の人が理解することが必要」という葛藤にも似た意識を自由記述から報告している。これに加え、女性・男性保育者を対象とした意識調査(斎藤・木下・仲山ら, 1998¹¹⁾; 斎藤・平田, 2008¹²⁾; 小橋・早川・安井, 2008¹³⁾; 青野, 2009¹⁴⁾)として、斎藤ら(2008)¹⁵⁾は質問紙調査によって、女性保育者は男性保育者に対して肯定的である一方、男性保育者の男性保育者に対する評価は否定的であったとの結果を報告している。男子学生を対象とした意識調査においては、かなり過去の調査であるが宮本(1984)¹⁶⁾が男性保育者志望の学生は同情などの情緒性を含めて女性的、中性的な傾向を示していることを報告している。女子学生を対象とした意識調査においては、井村(1984)¹⁷⁾が女子学生は保育所で男性が保育に携わることに賛成しているが、おおよびさに不安を感じている者が多いことを報告している。また、男子学生とともに学び生活する中で、男性保育者のおかれた厳しい経済状況を直視しているようだと言っている。これ等に加え、男性保育者に対するイメージに関する研究(中田, 2004)¹⁸⁾や保育職の継続をめぐる男性の思いや葛藤を中心にし、男性保育者をめざした学生の現在に関する研究(富田・小野, 2011a¹⁹⁾; 2012b²⁰⁾)などがある。

このように、男性保育者に対する意識に関する研究は様々な対象から実施されているが、先行研究のように positive な側面と negative な側面の結果が報告されていることが分かる。一般的に、世間では男性保育者への社会的期待の高まりという positive な側面がクローズアップされて目立っている傾向にあると思われるが、その背景にある男性保育者に対する negative な側面から男性保育者の意識に迫っていくことも重要であると考えられる。なぜなら、男子保育者の実態を negative な側面から直視していくことにより、よりリアルな資料が得られるからである。男性保育者の実態として、現実的には「男性保育者の寿退社」と呼ばれる結婚退社、数年を経て他業種への転職が多くみられる等、定着率が低いことが問題である(菊地, 2010)²¹⁾とされている。さらに、現実には長年女性の職域であったため、待遇の不満や就労に必要な設備(男子更衣室・男子トイレ)などの就労環境でさえ整っていないのである。こ

のように、男性保育者の早期離職率が極めて高いのが現状である。この矛盾を帯びた現状を踏まえると、本当に男性保育者は社会的に期待されているのか不透明である点が事実的な問題であろう。男性保育者の早期離職には様々な要因が複合的に絡み合っていることが推測されるが、根本的な要因は一体何なのであろうか。

男性保育者の早期離職の主な要因について、斎藤ら(2008)²³⁾は主に低賃金と職場内の人間関係、女性の仕事であるというイメージの3点であることを報告している。また、松本・氏家・戸田・高橋(2012)²³⁾は、男性保育者の早期離職には男子学生の保育者を目指す志望時期と志望動機の内容に関係性があることを示唆している。なぜなら、「男子学生が保育者を志望する分岐点は高校時代と非常に遅く、また、具体的なきっかけが特にあったわけではなく、進路を決めるため、何でもいから資格が欲しかった」といった理由を保育者に興味を持ったきっかけとして認められた(松本・氏家・加藤・戸田, 2010)²⁴⁾ことを報告しているからである。この結果は、高校卒業が目前に迫った男子学生が進路を決めなければならないこと、社会的に資格取得の必要性があることから、何でもいから資格を取得しようと考えたと捉えられる。これは、子どもが好きだから保育者になりたいという積極的な志望動機とはいえない側面がある。こういった動機を抱えた男子学生は、実際に保育者になったとしても離職につながる可能性があることを示唆している。つまり、現在、保育者を目指す男子学生は、積極的または消極的な志望動機をもつというタイプの二極化が起きているということである。そして、松本ら(2012)²⁵⁾は「保育者養成校は男子学生の保育者志望の時期や志望動機の質、離職との関係も視野に入れて総合的に指導していく必要がある」と述べている。

男性保育者の離職に関する研究として、富田ら(2011)²⁶⁾は過去に保育所や幼稚園で働いた経験がある卒業生に質問調査を行った。その結果、数名という退職者のデータではあるものの、経済的な理由などから1から3年以内に早期離職していることを報告している。また、働く意思があっても契約切れによる就労継続の断念という退職が存在することを報告している。一方、氏家ら(2013)²⁷⁾は保育者養成校の卒業生(卒業後5年未満の者)であり保育所または幼稚園を実際に退職した者を若干名ではあるがその対象とし、就労期間や退職理由、現在の仕事とその満足度を調査した。その結果、退職者の約8割が1年以内の早期退職であること、子どもが好きであるとともに子どものお世話好きでもあり、職場体験やボランティア活動を価値あるものと捉え、そしてまた、保育者になることを単に誰かに勧められたからという消極的な志望動機ではなかったことを報告している。また、退職後も半数以上の者が保育園や児童館に再就職していることから、彼らの子どもが好きであり保育関係に携わろうとする気持ちを読み取っている。さらに、男性保育者の具体的な退職理由は斎藤ら(2008)²⁸⁾と同様、自身の保育技術の要因よりも同僚や上司との人間関係や低賃金を要因としている傾向にあった。これらの要因から、「彼らは子どもが好きだけでは仕事が続けられないと

行き詰まり、精神的に不安定にある結果、早期退職となっている」ことを示唆している(氏家ら, 2013)²⁹⁾。しかし、男性保育者の早期離職者を調査対象にすることが困難であることから、早期離職に関する要因が行政に関連する待遇面であるのか、また、園内における人間関係などの何らかのものであるのか、保育者養成校の指導力不足であるのか、男性保育者自身に関するものであるのかを特定することは実に困難である。

ここで特筆すべき点は、男性保育者研究としてわずか2件のみ該当したが(富田ら, 2011³⁰⁾; 氏家ら, 2013³¹⁾)、退職せざるを得なかった男性保育者の退職理由などの側面にあえて焦点を当てていくことの重要性である。一見、世間では離職者に調査を求めるといったデリケート且つ negative であろうと捉えられる傾向にある男性保育者への意識を紡ぎ出していくことが、男性保育者研究をより一歩深める要因となり得る可能性を秘めていることである。そこで、本研究では男性保育者に対する社会的意識を明らかにするための基礎的資料を得ることを目的とする。具体的には、保育者を志す学生本人及び現場で直接的に男性保育者とのかかわる女性保育者を主な対象とする。まず、保育者志望学生を対象とした場合において、専門学校と短期大学、大学の学生の意識を比較した男性保育者研究は数少ない。さらに、斎藤ら(2008)³²⁾は女性保育者が男性保育者に対して肯定的な意識を抱いていると述べているが、この結果は他の先行研究においても同様の傾向が示されている点に着目する。現在、幼稚園や保育所に働く女性保育者は全体の9割を占めているが、斎藤ら(2008)³³⁾の調査結果を踏まえ女性保育者が男性保育者に対して肯定的な意識を抱いているとの前提のもと、幼稚園や保育所等における男性保育者の必要性及び理想的な保育者の男女比について明らかにする。これによって、男性保育者に対する positive または negative な意識をより一歩深く明らかにすることができると考えられる。その論拠として、第1に、幼稚園や保育所における保育者の理想的な男女比の意識について明らかにされた調査がないこと、第2に、男性保育者が必要であるという positive な意識には質の違いがあると考えられるからである。つまり、男性保育者が保育現場で意識的に必要であるとされていたとしても、大げさに言えば5対5までの必要性を感じられているとは限らないからである。さらに言えば、9対1や8対2程度の必要性が現実なのかもしれない。

以上、幼稚園や保育所における男性保育者の必要性及び理想的な保育者の男女比の意識について明らかになることにより、男性保育者自身もまたその現実を直視して保育現場での生き方を考えるうえでの何らかの指標になるだろう。本研究では、主に男性保育者に対する意識調査に焦点を当てるが、その意識を裏付けるであろうイメージ調査も含めることとする。また、低年齢児から幼児までのかかわる男性保育者に対する意識等を明らかにするため、保育所の女性保育士を調査対象とする。このように、本研究は男性保育者が社会的に必要であるとの世間の声に反し、早期離職率が高いというこの矛盾を帯びた実態を新しい切り口から透明化しようとする点においては大変意義深い。

Ⅱ. 調査

(1) 目的

本調査は、幼稚園や保育所等における男性保育者の必要性及び理想的な保育者の男女比の意識に関する調査を実施し、男性保育者に対する意識の質を明らかにするための基礎的資料を得ることを目的とした。

(2) 調査方法

- ① 調査対象：関東近県の保育者養成校学生と保育士である。専門学校生 50 名（男性 1 名、女性 49 名）・短期大学生 146 名（男性 5 名、女性 141 名）・大学生 138 名（男性 44 名、女性 94 名）、保育士 77 名（男性 5 名、女性 72 名）の合計 430 名に質問紙を配布・回収した。合計 411 名（男性 55 名、女性 360 名：回収率 96%）。
- ② 調査期間：調査時期は平成 25 年 12 月～平成 26 年 12 月であった。
- ③ 調査手続き：保育者養成校の教員に調査協力を依頼し、質問紙による調査を実施した。
- ④ 倫理的配慮：本研究で得た個人情報は外部に漏洩することや研究以外の目的で使わないこと、また、研究への参加は任意であり、同意しない場合もいかなる不利益も受けないことを書面で提示するとともに、口頭で説明して了解を得た。

⑤調査内容

【フェイスシート】“①性別、②年齢、③住まい、④就労形態、⑤職種及び所属、⑥子育て経験、⑦子どもの年齢及び預け先、⑧最終学歴”の 8 項目である。

【質問紙】“①乳幼児期の教育・保育の必要性（5 段階評定）、②小学校教育の必要性、③幼稚園や保育所に男性保育者がいることを知っているかどうか、④子どもとかわる保育者は男女どちらが適しているかどうか、⑤男性保育者の必要性、⑥男性・女性保育者の就職初年度における本俸年収の予想、⑦男性・女性保育者の平均勤続年数の予想、⑧保育園や幼稚園、小学校で働く男性保育者の割合の予想、⑨保育所と幼稚園における理想的な保育者の男女比”の 9 項目である。さらに、男女保育者に対する保育者イメージ 66 項目について、男女保育者におけるイメージを 5 段階評定で求めた。質問紙 18 番目 66 の問は保育者に対するイメージを男女に分けて調査をした。調査内容は本多・小林・櫻井ら (2007)³⁴⁾「保育現場において認識されている男性保育者の特徴」及び中道圭人 (2012)³⁵⁾による他父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連から引用した。

Ⅲ. 結果

1. 男性保育者の必要性に関する意識の割合について

本研究では、男子学生と男性保育者の調査者数が女子学生や女性保育士よりも少ないことや性差の要因によってデータに影響が出ることが予想されるため、女子学生と女性保育士を調査対象として分析を行った。男性保育者の必要性に関する意識の割合について明らかにするために、未回答を除く調査委対象者から得られた回答に対してフィッシャーの直接確率検定を行った。その結果、男性保育者の必要性に関する意識の割合について（表1）、全体的に有意な差が見られた（ $\chi^2=57.25$, $df=12$, $p<.001$ ）。「不必要」では、保育者の意識の割合が有意に高かった。「どちらかといえば必要」では、短大生の意識の割合が有意に高く、保育者の意識の割合が有意に低かった。「どちらともいえない」では、専門学校生の意識の割合が有意に高く、保育者から大学生の順に意識の割合が有意に低かった。「いることが望ましい」では、所属の関係性に有意な差は見られなかった。「必ず必要」では、保育者の意識の割合が有意に高く、短大生の意識の割合が有意に低かった。

表1 男性保育者の必要性に関する意識の割合の比較（n=352）

	所属				合計
	専門学校生	短大生	大学生	保育者	
不必要	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)	1.4%(1)	0.3%(1)
調整済残差	-0.4	-0.8	-0.6	2.0	
どちらかといえば必要	2.2%(1)	14.9%(21)	7.4%(7)	1.4%(1)	8.5%(30)
調整済残差	-1.6	3.5	-0.4	-2.4	
どちらともいえない	33.3%(15)	15.6%(22)	6.4%(6)	4.2%(3)	13.1%(46)
調整済残差	4.3	1.2	-2.2	-2.5	
いることが望ましい	57.8%(26)	61.7%(87)	68.1%(64)	59.7%(43)	62.5%(220)
調整済残差	-0.7	-0.3	-1.3	-0.5	
必ず必要	6.7%(3)	7.8%(11)	18.1%(17)	33.3%(24)	15.6%(55)
調整済残差	-1.8	-3.3	0.8	4.6	
合計	100%(45)	100%(141)	100%(94)	100%(72)	100%(352)

$\chi^2=57.25$, $df=12$, $p<.001$

2. 保育所及び幼稚園における保育者の理想的な男女比の意識について

(1) 保育所における保育者の理想的な男女比の意識について

保育所における理想的な保育者の男女比に関する意識の割合について明らかにするために、未回答を除く調査委対象者から得られた回答に対してフィッシャーの直接確率検定を行った。その結果、保育所における保育者の理想的な男女比の意識の割合について（表2）、全体的に有意な差が見られた（ $\chi^2=53.70$, $df=21$, $p<.001$ ）。「男性0+女性10割」では、専門学校生の意識の割合が有意に高く、短大生の意識の割合が有意に低かった。「男性1+女性9割」と「男性2+女性8割」では、所属の関係性に有意な差は見られなかった。「男性3割+女性7割」では、保育者の意識の割合が有意

に高かった。「男性4割+女性6割」では、所属の関係性に有意な差は見られなかった。「男性5割+女性5割」では、大学生の意識の割合が有意に高く、保育者の意識の割合が有意に低かった。「男性が女性より多い方が良い」では、保育者の意識の割合が有意に高かった。「わからない」では、短大生の意識の割合が有意に低かった。

表2 保育所における保育者の理想的な男女比の意識の比較 (n=343)

	所属				合計
	専門学校生	短大生	大学生	保育者	
男性0+女性10割	11.1%(5)	0.0%(0)	1.1%(1)	0.0%(0)	1.7%(6)
調整済残差	5.1	-2.0	-0.5	-1.3	
男性1割+女性9割	20.0%(9)	17.3%(24)	10.1%(9)	8.6%(6)	14.0%(48)
調整済残差	1.2	1.4	-1.2	-1.5	
男性2割+女性8割	37.8%(17)	38.8%(54)	29.2%(26)	25.7%(18)	33.5%(115)
調整済残差	0.6	1.7	-1.0	-1.6	
男性3割+女性7割	17.8%(8)	26.6%(37)	24.7%(22)	48.6%(34)	29.4%(101)
調整済残差	-1.8	-0.9	-1.1	3.9	
男性4割+女性6割	6.7%(3)	7.9%(11)	13.5%(12)	8.6%(6)	9.3%(32)
調整済残差	-0.7	-0.7	1.6	-0.2	
男性5割+女性5割	2.2%(1)	8.6%(12)	16.9%(15)	2.9%(2)	8.7%(30)
調整済残差	-1.7	-0.1	3.1	-2.0	
男性が女性より多い	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)	1.4%(1)	0.3%(1)
調整済残差	-0.4	-0.8	-0.6	2.0	
わからない	4.4%(2)	0.7%(1)	4.5%(4)	4.3%(3)	2.9%(10)
調整済残差	0.7	-2.0	1.0	0.8	
合計	100%(45)	100%(139)	100%(89)	100%(70)	100%(343)

$$\chi^2=53.70, df=21, p<.001$$

(2) 幼稚園における男性保育者の理想的な男女比の意識について

幼稚園における理想的な保育者の男女比に関する意識の割合について明らかにするために、未回答を除く調査委対象者から得られた回答に対してフィッシャーの直接確率検定を行った。その結果、幼稚園において理想的であると思われる保育者の男女比の割合について（表3）、全体的に有意な差が見られた（ $\chi^2=45.01$, $df=21$, $p<.001$ ）。その結果、「男性0+女性10割」では、専門学校生の意識の割合が有意に高かった。「男性1+女性9割」では、専門学校生の意識の割合が有意に高く、大学生の意識の

表3 幼稚園の男女保育者の理想的な割合についての認識 (n=342)

	所属				合計
	専門学校生	短大生	大学生	保育者	
男性0+女性10割	6.7%(3)	1.4%(2)	1.1%(1)	0.0%(0)	1.8%(6)
調整済残差	2.7	-0.4	-0.5	-1.2	
男性1割+女性9割	24.4%(11)	16.5%(23)	3.4%(3)	17.4%(12)	14.3%(49)
調整済残差	2.1	1.0	-3.4	0.8	
男性2割+女性8割	35.6%(16)	30.2%(42)	25.8%(23)	33.3%(23)	30.4%(104)
調整済残差	0.8	-0.1	-1.1	0.6	
男性3割+女性7割	17.8%(8)	31.7%(44)	28.1%(25)	31.9%(22)	28.9%(99)
調整済残差	-1.8	0.9	-0.2	0.6	
男性4割+女性6割	8.9%(4)	8.6%(12)	18.0%(16)	7.2%(5)	10.8%(37)
調整済残差	-0.4	-1.1	2.5	-1.1	
男性5割+女性5割	2.2%(1)	9.4%(13)	19.1%(17)	4.3%(3)	9.9%(34)
調整済残差	-1.9	-0.3	3.4	-1.7	
男性が女性より多い	0.0%(0)	0.7%(1)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.3%(1)
調整済残差	-0.4	1.2	-0.6	-0.5	
わからない	4.4%(2)	1.4%(2)	4.5%(4)	5.8%(4)	3.5%(12)
調整済残差	0.4	-1.7	0.6	1.2	
合計	100%(45)	100%(139)	100%(89)	100%(69)	100%(342)

$$\chi^2=45.01, df=21, p<.001$$

割合が有意に低かった。「男性 2+女性 8 割」と「男性 3+女性 7 割」では、所属の関係性に有意な差は見られなかった。「男性 4 割+女性 6 割」では、大学生の意識の割合が有意に高かった。「男性 5 割+女性 5 割」では、大学生の意識の割合が有意に高かった。「男性が女性より多い方が良い」と「わからない」では、所属の関係性に有意な差は見られなかった。なお、短大生においては、全ての関係において有意な差は見られなかった。

3. 男女保育者に対するイメージによる因子分析

男性保育者に対してどのようなイメージを持っているのかを確認するため、合計 66 項目の解答に対してデータ分析を行った。全ての項目に対して、天井効果とフロア効果の確認による弁別力がないと判断した 12 項目を除外した。その上で、残りの 54 項目を主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った（表 4）。スクリープロットや因子解釈の可能性から総合的に判断し、3 因子構造が妥当であると判断した。因子負荷量が .40 を下回る項目や .40 以上であっても他の因子への負荷量が .30 以上の項目を削除して再度分析を行い、前述の基準を満たすようになるまで因子分析を繰り返した。その結果、32 項目 3 因子構造が妥当であると判断した。表 4 にプロマックス回転後の因子パターン、Cronbach の α 係数を示した。第 1 因子は 16 項目からなる。「ボール遊びやゲームなど、子どもと一緒に遊ぶ時間を持つとする」「いつも何か刺激的なことを求めている」のように、活動的な特徴を示していることから「活動性」と命名した。第 2 因子は 12 項目からなる。「細やかな気配りができる」「掃除が行き届いて出来る」のように、周囲に気を配ることができるという特徴を示していることから「気配り」と命名した。第 3 因子は 4 項目からなる。「他人の言動をいつも気にする傾向がある」「人が自分を認めてくれないと不安に感じる」のように、周囲の状況に自分を合わせる特徴を示していることから「繊細」と命名した。

表4 男性保育者に対するイメージの因子分析結果

項目内容	因子		
	I	II	III
因子Ⅰ($\alpha=.92$)			
50. 図書館や博物館など静かにしなければならない場所では、子どもを静かにさせる	.80	-.16	-.08
44. ボール遊びやゲームなど、子どもと一緒に遊ぶ時間を持とうとする	.78	-.04	.10
49. 子どもが保育者と決めた約束を守らない時、その約束をもう一度教える	.76	-.04	.03
54. 子どもが寝る時間になっても、遊んでいて寝ない時、静かにさせる	.73	-.17	-.13
48. 園外や園庭で遊ぶとき、できる限り子どもが行きたい所ややりたいことを取り入れるなど	.72	-.03	.07
45. 園外に出かけて、子どもが疲れているなど感じた時など、休んだり子どもを抱っこする	.66	.05	-.05
43. 子どもがイライラしていると思ったとき、「どうしたの」と聞いてみる	.65	.12	-.04
47. 子どもが間違った行動をした時、どうしてその行動をしたのか理由を聞き、どうしたらよかったのかを話し合う	.65	.05	.01
41. 子どもが一人で遊んでいて、退屈そうだなと思った時、加わって一緒に遊ぶ	.62	.15	.13
39. 同僚や上司と協力して仕事ができる	.57	.15	.12
59. いつも何か刺激的なことを求めている	.56	-.15	-.10
34. 絵本等の読み聞かせができる	.52	.27	.01
53. 子どもが友達と遊んでいて、友達が使っている玩具を無理やり取ってしまった時、それを返させる	.50	-.10	-.14
42. 子どもを抱きしめたり、やさしい言葉をかけて愛情を示している	.50	.26	-.04
30. パソコンなどのOA機器の取扱いが得意である	.49	.05	.05
27. 保育の研修や研究に意欲的に取り組むことができる	.49	.25	.00
因子Ⅱ($\alpha=.85$)			
16. 細やかな気配りができる	-.16	.77	-.06
29. わかりやすく丁寧に保育記録をとることができる	-.15	.69	.05
15. 園庭などで植物の栽培ができる	.00	.65	-.05
26. 静かな遊びを子どもと楽しむことができる	-.08	.65	-.06
37. 保護者に育児について等のアドバイスが出来る	-.02	.65	-.04
33. 掃除が行き届いて出来る	-.06	.62	.14
38. 食育について正しく指導出来る	.12	.59	.11
14. 子どもの心の変化に気づきやすい	-.02	.59	-.11
20. 動物の飼育に力を発揮する	.12	.54	.03
18. あいさつやマナーなどのしつけが得意である	.05	.52	.00
35. 歌や音楽の指導が出来る	.26	.44	-.03
60. こつこつ物事をすすめる	.12	.40	-.16
因子Ⅲ($\alpha=.73$)			
66. 何嫌なことがあったら、すぐに元気がなくなる	.02	.04	.70
65. 他人の言動をいつも気にする傾向がある	.09	-.13	.70
61. 人が自分を認めてくれないと不安に感じる	-.10	-.10	.66
63. 嫌いな人と一緒に仕事することは苦手である	-.18	.07	.61
因子間相関			
I	—	.67	.17
II		—	-.03
III			—

Ⅳ. 考察

本研究は、幼稚園や保育所における男性保育者の必要性及び理想的な保育者の男女比の意識に関する調査を実施し、男性保育者に対する意識の質を明らかにして今後の保育者養成に寄与するための基礎的資料を得ることを目的とした。

男性保育者の必要性については、女性保育士は「必ず必要」として positive に認識しているが、これは実際に男性保育者と共にかかわりながら働く中で、父親が不在な子どもの父親代わりの存在になり得るという父性、力仕事や安全面、「いつも何か刺激的なことを求めている」といった男性ならではのイメージも男子保育者に対する意識に影響を及ぼしているだろう。しかし、「必ず必要」とするよりも「いることが望ましい」が約 60% で一番高い割合を占めている。さらに、女性保育士は男性保育者の必要性を「必ず必要」「いることが望ましい」と意識しつつも、保育所と幼稚園の理想的な保育者の男女比は「男性 5 割 + 女性 5 割」とフラットではなく、高い割合で「男性 2 割 + 女性 8 割」や「男性 3 割 + 女性 7 割」と低く意識している。これは、富田ら (2011)³⁶⁾ が男性保育者は経済的な理由などから 1 から 3 年以内に早期離職していることを報告しているように、女性保育士は男性保育者と共に働く中でその必要性を意識しながらも、いつか退職してしまうという現実を間近で目の当たりにしているからではないだろうか。これは、男性保育者との「かかわり有るが故」の必要性の意識であると考えられる。また、ここには女性保育士が積み上げてきたキャリアから感じ取る意識も含まれているだろう。

女子大学生においては、女性保育士の次に男性保育者を「必ず必要」として positive に意識しているが、「いることが望ましい」が約 68% で一番高い割合を占めている。これは、男性保育者と触れ合う機会が無いにしても、世間と同様に「かかわり無き」必要性を感じていると考えられる。また、男性保育者の必要性を「いることが望ましい」と意識しつつも、保育所と幼稚園の理想的な保育者の男女比は、約 30% の割合で「男性 2 割 + 女性 8 割」や「男性 3 割 + 女性 7 割」と低い。このように、女性保育士と女子大学生の理想的な保育者の男女比の意識には同様の傾向があることが分かる。女子専門学校生においては、「どちらともいえない」が約 33% と高く意識していることが明らかであるが、女性保育士と女子大学生と同様に「いることが望ましい」が約 58% で一番高い割合を占めている。これは、女性保育士と同様に男性保育者に対する意識を抱いていたとしても、女性保育士のように直接的に男性保育者と触れ合う機会も無いことから、「かかわり無き」必要性として「どちらともいえない」といったアンビバレントな意識であると推測される。また、「いることが望ましい」と男性保育者の必要性を意識しつつ、保育所と幼稚園の理想的な保育者の男女比は、「男性 2 割 + 女性 8 割」から「男性 1 割 + 女性 9 割」「男性 3 割 + 女性 7 割」

「男性0割＋女性10割」の順に低く意識している。女子短大生においては、「どちらかといえば必要」であると男性保育者の必要性を意識しているが、「いることが望ましい」が約62%で一番高い割合を占めている。また、男性保育者を「かかわり無き」必要性として「いることが望ましい」と意識しつつ、保育所と幼稚園の理想的な保育者の男女比は、女子専門学校生の意識と同様に「男性2割＋女性8割」、「男性3割＋女性7割」「男性1割＋女性9割」の順に低く意識している。

このように、全体的に約60%以上の割合で男性保育者を「いることが望ましい」との必要性を示しているにもかかわらず、各所属によって理想的な保育者の男女比に関する意識に微妙な違いがあるのだろうか。女子学生等は女性保育士とは異なり、男性保育者と触れ合う機会はほとんど無いため影響を受ける可能性は低いはずである。今回の調査では、男性保育者に対するイメージが「活動性」「気配り」「繊細」であると認められたが、男性保育者とのかかわりが無い者にとってその必要性などは世間的なイメージで判断する以外にないだろう。

この点について、先にも述べた松本ら(2010)³⁷⁾の「男性保育者を志望する男子学生は積極的または消極的な志望動機をもつというタイプの二極化が起きている」の視点から述べてみたい。ここでの保育者の理想的な男女比の意識における割合の高低において、積極的・消極的な志望動機を要因にする根拠としては、女子学生の男子学生に対する意識にあると考える。具体的には、女子学生は幼少期から自分が園に通っていた時の保育者への憧れなど、積極的な志望動機を抱いて保育者を目指す傾向が強い。しかし、男子学生は「誰かに勧められて」「単に資格がほしかったから」「どこかの学校に入ればそれでよかった」など、消極的な理由で保育者を目指す者も少なからず存在する。そのような消極的な志望動機の男子学生の中には、進路変更を選択する者も少なくないだろう。つまり、積極的な志望理由を抱きながら保育者を目指す女子学生は、進路変更をしていく男子学生の存在に触れていく過程において男性保育者に対する必要性の意識が低下すると推測される。

この逆に、明確な志望動機を抱きながら保育者になりたいとの明確な志望動機を抱き入学した男子大学生とのかかわりにおいては、女子学生はその必要性を感じていると考えられる。特に、大学生においては、他と比較して唯一「男性4割＋女性6割」「男性5割＋女性5割」を理想的な保育者の男女比とするやや高い意識がある。よって、男子大学生においては、より積極的な志望動機の割合が多いのではないだろうか。井村(1984)³⁸⁾が女子学生は保育所で男性が保育に携わることに賛成している反面、男子学生とともに学び生活する中で、男性保育者のおかれた厳しい経済状況を直視しているようだ述べているが、女子学生は女性保育士のように男性保育者と直接かわっているわけではないため理想的とする男性保育者の割合が高いと考えられる。つまり、女性保育士や保育者志望学生における男性保育者の男女比の意識には、男性保育者及び男子学生との直接的な「かかわりの有無」が影響していることが示唆される。

以上、世間では男性保育者の存在が社会的に必要であると意識されているが、今回の調査によって、その意識の実態を示すための基礎的資料が得られたのではないだろうか。特筆すべき点は、女性保育士や女子学生は男性保育者の必要性を意識しているが、その必要性は「いることが望ましい」が大半であり、その質には男女比という差異があることが明らかになったことである。ここでの質には、男性保育者及び男子学生との直接的な「かかわりの有無」やイメージが影響しているのではないだろうか。後者のイメージにおいては、今回の調査では男性保育者に対するイメージが「活動性」「気配り」「繊細」であったが、特に「何か嫌なことがあったら、すぐに元気がなくなる」「他人の言動をいつも気にする傾向がある」「人が自分を認めてくれないと不安に感じる」という「繊細」イメージは積極性や協調性が求められる保育者の世界において、男性保育者の必要性における男女比意識の割合を引き下げてしまう要因ではないだろうか。これ等の結果は、現職の男性保育者やその職を志望する男子学生が現実を直視していくための一つの指標になるだろう。

今後の課題は、女子学生と女性保育士に調査をする場合、保育者志望の男子学生と男性保育者とのかかわりがあるかどうかを明らかにしたうえ、男性保育者に対する必要性の質を明らかにすることである。また、その結果、「男性2割＋女性8割」のような低い男性保育者の必要性が示されたならば、それが現実であるがその割合の根拠となり得るであろうイメージを詳細に把握することが必要である。さらに、保育者養成校としては男性保育者を養成する立場であることから、世間から必要性を高く意識してもらえようような指導を検討していく必要があるだろう。

謝辞

本論文の作成に当たり、関口はつ江先生に多大なご教示をいただいたことに深謝いたします。また、調査に協力いただいた方々にも深く感謝いたします。

注 本論文は、日本保育学会第66・67・68回大会において一部発表したものを加筆・修正したものである。

引用・参考文献

- 1) 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」(答申)
－子どもの最善の利益のために幼児教育を考える－, 中央教育審議会, 平成17年
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm, 平成28年10月3日.
- 2) 柏まり・佐藤和順 (2015)「子育て支援における男性保育者の役割に関する一考察」,

- 『就実論叢』, 45, pp.275-286.
- 3) 中田奈月 (2002)「男性保育者の創出－男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響」, 保育学研究』, 40(2), pp.6-204.
 - 4) 齋藤政子 (2002)「保育園に子どもを預ける親への男性保育者に関する意識調査の検討」, 『日本保育学会大会発表文集』, 55, pp.370-371.
 - 5) 松本希・宮宅健人・澤津まり子 (2014)「男性保育者に対する保護者の意識に関する研究」, 『就実論叢』, 44, pp.303-309.
 - 6) 再掲 (5)
 - 7) 長田洋子 (1997)「男性保育者の意識調査：男子卒業生へのアンケート結果の報告」, 『日本保育学会大会研究論文集』, 50, pp.294-295.
 - 8) 氏家博子・松本佳子・戸田大樹 (2013)「男性保育者の意識に関する調査－現職と離職者を対象として－」, 『日本保育学会大会研究論文集』, 66, p.814.
 - 9) 安井恵子 (2013)「保育者養成機関における男性保育者の養成について 卒業生にみる男性保育者の意識調査から」, 『滋賀短期大学研究紀要』, 38, pp.55-66.
 - 10) 再掲 (9)
 - 11) 齊藤政子・木下比呂美・仲山佳秀他 (1998)「男性保育者に関する調査研究 (2)：女性保育者を対象とした男性保育者に関する意識調査から」, 『湘北紀要』, 19, 47-68.
 - 12) 齋藤正典・平田健朗 (2008)「保育現場における男性保育者に対する意識調査」, 『盛岡大学』, 25, pp.67-77.
 - 13) 古橋紗人子・早川滋人・安井恵子 (2008)「男性保育者の有効性について－父親のマンパワー 男性保育者の意識調査から」, 『滋賀女子短期大学研究紀要』, 33, pp.59-71.
 - 14) 青野篤子 (2009)「園の隠れたカリキュラムと保育者の意識」, 『福山大学人間文化学部紀要』, 8, pp.19-34.
 - 15) 再掲 (12)
 - 16) 宮本博伊 (1984)「男性保育者及びその志望学生の意識調査」, 『日本保育学会大会研究論文集』, 37, pp.656-657.
 - 17) 井村圭壮 (1984)「男子保育学生在学による影響について－特に女子学生の男性保育者に対する意識の分析を中心として－」, 『日本保育学会大会研究論文集』, 32, pp.682-683.
 - 18) 中田奈月 (2004)「男性保育者による「保育者」定義のシークエンス」, 『家族社会学研究』, 16(1), pp.41-51.
 - 19) 富田昌平・小野文子 (2011)「男性保育者をめざした学生たちは今どうしているのか？ (1)－保育専攻を卒業した男子学生への質問紙調査から－」, 『中国学園紀要』, 10, pp.97-108.

- 20) 富田昌平・小野文子 (2012)「男性保育者をめざした学生たちは今どうしているのか? (2) —保育職への参入・継続をめぐる男性の思いや葛藤を中心に—」,『中国学園紀要』, 11, pp.169-180.
- 21) 菊地政隆 (2010)「男性保育者を取り巻く近年の保育現場の動向と課題」,『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』, 17, pp.235-245.
- 22) 再掲 (12)
- 23) 松本佳子・氏家博子・戸田大樹・高橋健司 (2012)「男子学生が保育者を目指す要因に関する研究」,『日本保育学会大会研究論文集』, 65, p.521.
- 24) 松本佳子・氏家博子・加藤孝士・戸田大樹 (2010)「保育者への志望動機と、理想の保育者像について」,『日本保育学会大会研究論文集』, 63, p.256.
- 25) 再掲 (23)
- 26) 再掲 (19)
- 27) 再掲 (8)
- 28) 再掲 (12)
- 29) 再掲 (8)
- 30) 再掲 (19)
- 31) 再掲 (8)
- 32) 再掲 (12)
- 33) 再掲 (12)
- 34) 本多潤子・小林育子・櫻井登世子ら (2007)「保育現場において認識されている男性保育者の特徴」,『田園調布学園大学紀要』, 1, pp.153-176.
- 35) 中道主人 (2012)「父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動」,『静岡大学教育学部研究報告: 人文・社会・自然科学篇』, 63, pp.109-121.
- 36) 再掲 (19)
- 37) 再掲 (24)
- 38) 再掲 (17)

An Opinion Poll Regarding the Requirement for Male Nursery School Staff and the Ideal Male-to-Female Ratio among Nursery School Staff

**Focusing on the Mainly University Students who Wanted to Work
at Nursery Schools and Female Nursery School Teachers**

**Daiki Toda Kayoko Matsumoto
Hiroko Ujiie Yukiko Araki
Shiori Iizuka Kenji Takahashi**

In the present study, we conducted an opinion poll regarding the requirement for male nursery school staff and the ideal male-to-female ratio among nursery school staff. The aim was to obtain basic materials to contribute to the education of nursery school staff. Results of the questionnaire showed that on the whole, there was a requirement for male nursery school staff, with approximately 63% of respondents stating that “it would be nice if they were here”. In addition, the ideal nursery school staff male-to-female ratio was low; the main responses were “20% men, 80% women” and “30% men and 70% women”. Furthermore, a factor analysis was performed regarding the image of male nursery school staff. The three factors observed were activity, consideration and delicate. This also suggests the fact that the presence of a direct connection to male nursery school staff and male students affects the proportion of awareness of the male-to-female ratio.